



第38巻 第6号

史学・地理学・考古学

特集 共同体の諸問題

- 天ツ神族・国ツ神族と双分組織……………三 品 彰 英 (1)
キタイ氏族制の起源とトーテミズム……………愛 宕 松 男 (19)
形成期の土地共同体……………田 中 裕 (48)
惣について……………石 田 善 人 (67)
共同体の地理的規模……………水 津 一 朗 (91)
中国に於ける水利慣行……………天 野 元 之 助 (123)
南朝鮮土着文化の考古学的考察……………有 光 教 一 (150)

シンポジウム

- 時代区分及び地域区分の問題…………… (172)
——史学研究会特別例会記事——

書評と紹介

- 宇都宮清吉：漢代社会経済史研究……………杉 村 壮 三 (180)
藤岡謙二郎：先史地域及び都市域の研究……………末 尾 至 行 (184)

学界消息

史 学 研 究 会

京都大学文学部内

京都大学文学部東洋史研究室
東洋史研究会
昭和三十三年三月二十八日

学界消息

史学研究会関係

史学研究会特別例会 七月二日(土)

京大文学部第一教室

詳細は本誌一七二頁以下に掲載

国史関係

読史会春季大会 七月三日(日)

京大薬友会館講演室

若狭早瀬浦歩行商人について

文政六年の国訴について

中世末期の鞆瀬庄について

神宮経済の基盤とその変質

畿内庄園の成立について

近世瀬戸内塩田開発の諸問題

大和王龍寺の祠堂銀貨付について

小野恵美男

神婦小夜衣について

船津 勝雄

明治前期の労働運動

山本 四郎

学界消息

した。

会の終了後、楽友会館バーラーにて懇親会が行われ、多数参加し、和気藹々のうちに閉会した。

東洋史関係

京都大学大学院懇談会 七月十六日(土)午後二時
後漢江淮の水稲技術 陳列館演習室
米田賢次郎

七月八日(金)午後一時
漢代の地方文化 法経第五教室
勞 幹

地理学関係

紀ノ川・吉野川流域総合調査

榎田川・吉野川・紀ノ川構造谷の交通系を基本課題とする歴史地理学的総合調査は、

昨年の榎田川調査にひきつづき、八月二十二・二十五日にわたり紀ノ川・吉野川流域に京都大学教職員を中心に約三十名のメンバーで展開された。参加者は京都大学織田・藤岡岡教授をチーフとし、奈良女子大・京都学芸大・和歌山大・立命館大にも及び、交通・人口・集落・農林業・工業・社会の各分野にわたり、古文書等の文献探訪や聴取調査・野外踏査に多大の収穫をあげえた。

考古学関係

「支那古玉図録」の発刊

今般「考古学資料綜覧第四冊」として、梅原教授の編纂による右記の図録が刊行された。

編集後記

隔月刊実施以来一ヶ年、ここに共同体特集として、諸氏の玉稿をあつめ二〇〇頁の大冊をお送りすることができたのは喜びにたえない。時代区分・地域区分のシンボリズムと共に新しい試みとして大いに御批判をおきかせ願ひ度い。とにも角にも順調な刊行が進む中で、編集部でははや来年の特集プランを考えている。お智慧をおかし下されば幸甚である。さて次の我々の願ひは、諸賢の多数の御来会によつて大会を最も意義あるものたらしめることである。(上横手)

【お知らせ】 会員には本号を百円でお頒ちしました。

史林 (第三八巻 第六号)

一九五五年十月二十五日印刷
一九五五年十一月一日発行 定価二百三十円

発行所 史学研究会

京都市左京区吉田本町
京都市文学部内

印刷所 中村印刷株式会社

京都市下京区七条御所ノ内東町三九

理事 長 堀江 俊秀
編輯主任 赤松 俊秀

THE SHIRIN

or the

JOURNAL OF HISTORY

Vol. XXXVIII, NO. 6

Nov. 1955

CONTENTS

Special Number

Studies in the Communal Relations

Articles :

The Dual Organization of the Tribal System of

Ancient Japan *S. Mishina* (1)

Kittan Clanship and Totemism *M. Otagi* (19)

The Formation of the Land Community *Y. Tanaka* (48)

A Study of So (惣) *Y. Ishida* (67)

The Geographical Scale of the Community *I. Suizu* (91)

Irrigation Customs in China *M. Amano* (123)

Archaeological Study on the Indigenous

Cultures of Southern Korea *K. Arimitsu* (150)

Symposium

Periorization and Regional Devision (172)

Book Reviews & News

Published

by

THE SHIGAKU KENKYUKAI
(*The Society of Historical Research*)

Kyoto University, Kyoto, Japan

か。二分体制はいかに発展し、部族の結成はいかにして実現したか。等々の問題がまだ未解決のまま山積している。隋唐時代のキタイ社会史は、かかる観点からその古代篇の本論として当然稿を改めて論述されねばならないであろう。

- ① A. Moret et G. Davy, Des clans aux empires, l'organisation sociale chez les Primitifs et dans l'Orient ancien. ch II
- ② Ibid
- ③ W. Rivers, Ibid
- ④ E. Durkheim, Ibid.
- ⑤ 遼史三十二 管衛志
- ⑥ W. Rivers, Ibid.
- ⑦ E. Durkheim, Ibid

—三〇・八・二四稿了—

曾我部静雄「その後の課役の解釈問題」(本誌三八ノ四所載)

頁	段	行	誤	正
31	下	八	免す)	免す)
"	"	十四	雜徭とするから	雜徭とあるから
33	下	十四	唐令上の	唐律令上の
36	上	四	課調の課は	課調の調は
"	"	六	疏義	疏議
"	"	九	驅使さる	驅使さる
38	上	十	「と説明し」から改行	
"	下	十一	租税租	租。税租。
42	下	十二	隋の制度に	隋初の制度に
"	末尾		疊寇將軍	湯寇將軍

五、結 語

以上私は「形成期の土地共同体」と題し、中世初期を舞台としてこの劃期にみられる共同体の変貌を示そうと試みた。共同体の変革を通じて、当時の政治・經濟的变化に一つの照明を与えようと試みたのである。まことにこの時期の共同体は、偉大な社會革命を内包していたのである。しかもその運動は、あくまで家共同体それ自体の自己發展であつた。それが他ならぬ土地共同体の抬頭という結果を産み出したのであつて、ここに所謂中世封建制の事實上の誕生を見届けようと思う。かくて領主制はレーエン契約を媒介契機として、旧來の家父長的家共同体を發展的に解消せしめ、それをば土地共同体に再編成する。それ故、土地共同体は、家共同体が本來的に具有していた共同の契機をば、自己の中に發展的に包摂する。その結晶が他ならぬ慣習權である。まことに慣習權の裡にこそ、土地共同体の歴史的性質を解明する最奥の鍵がひそんでいるように思われる。

梅溪昇「軍人勅諭の成立と西周の憲法草案」(三)
(本誌三八ノ三所載) 正誤表

頁	段	行	誤	正
六一	下	一	二十四 然シ ^⑤	二十四 然シ ²⁵
〃	〃	三	(例文一依リ)	〔例文一依リ〕
六五	上	七	採納シタル者	採納シタル者
〃	〃	一一	其婦哀スル	其婦哀スル
〃	下	一〇	別紙 々々入ル	別紙 々々入ル
六六	上	末	其簿冊	其簿冊
〃	下	一八	送付ス。	送付ス
〃	〃	〃	水昌	水昌
六七	上	一	第四遣外国公使	第四遣外国公使
六八	上	六	外官吏	外官吏
〃	〃	八	ノ檢ヲ	ノ權ヲ
〃	〃	一八		

主とする日本には、二圃制や三圃制が行われず、反対に二毛作・三毛作が行われているが、それ等の具体的差異は両者の農業経営の地理的差異に帰せらるべきであらう。

以上によつて、私は「惣村」を日本における封建的村落共同体と規定することに躊躇しない。しかし「惣村」は村落共同体の一つであつて、室町末期の「惣村」の衰退は、村落共同体が「惣」という形では維持され難くなつてきたことを示すものであり、村落共同体そのものの崩壊を示すものでないことは言うまでもない。

以上私は惣を惣庄と惣村とに区分し、惣村を中心としてその形成・機能・構造を考え、更に変容・衰退までの展開を一応跡づけたつもりである。或いは惣のもつ二面性——即ち支配機能の末端組織としての一面と、支配する抵抗組織としての一面のうち、前者が殊更浮彫りされた憾みがなくはない。もとよりそれは私の本意ではないが、紙幅もすでに尽きたので今は暫く擱筆し、「惣村」の衰退時期から役屋体制の成立への時代を中心とした考察は、稿を改めて論じたいと思う。

(一九五五年三月稿、八月改稿)

本稿の作成に当つては、多分に赤松俊秀教授の御教示にあずかつた。特に附記して謝意を表する。

① 郡中惣については、牧野信之助氏「中世末期における村落結合」に多くの事例をあげている。

② 「郷村制度と検地」(日本史研究一九号)、「封建制確立期の村落と農民の動向」(滋賀県立短期大学雑誌三号)、「太閤検地と家族構成——日本封建制の確立——」(ヒストリア八・九・一〇・一一号)

③ 八木哲浩氏「近時の太閤検地論について」(近世史研究一〇号)は、筆者の考えているところとは大分隔りがあり、又近刊されるといふ氏の著書を俟たねば軽々に批判することは許されないが、太閤検地再評価の提言そのものには異議がない。

史学研究会 例会

十二月三日(土) 午後一時・京大楽友会館

中国戦国時代に関する最近の考古資料 金 関 恕

銀差成立の過程について 岩 見 宏

——明代役法の一研究——

ミノア文字の解説をめぐつて 村 田 数之亮

- ⑬ 樞本亀次郎前註
⑭ 「南朝鮮に於ける漢代の遺跡」朝鮮總督府大正十一年度古蹟調査報告
⑮ 朝鮮總督府昭和七年度古蹟調査報告第二冊
⑯ 朝鮮總督府大正十二年度古蹟調査報告第一冊 圖版六六及び五九頁
⑰ 史林 第二八卷一號
⑱ 齋藤忠 朝鮮總督府昭和九年度古蹟調査報告第一冊
⑲ 朝鮮古蹟研究会昭和十三年度古蹟調査報告
⑳ 金元龍 「慶州九政里出土金石併用時代遺物に就いて」歴史學報 第一輯 (釜山)
㉑ 浜田耕作・梅原末治 「金海貝塚發掘調査報告」 (朝鮮總督府古蹟調査報告第一冊)
㉒ 小泉・梅原・藤田 朝鮮總督府古蹟調査報告第一冊
㉓ 有光教一 「石器時代の大邱」 (大邱府史)
㉔ 三上次男 「朝鮮における支石墓の在り方について」史學雜誌 第六十二篇第四號

執筆者紹介

三品彰英	同志社大学教授
愛宕松男	東北大学助教授
田中裕	京都大学講師
石田善人	京都大学大学院特別研究生
水津一朗	大阪市立大学助教授
天野元之助	大阪市立大学教授
有光教一	京都大学助教授
杉村壮三	汎愛高校教諭
末尾至行	京都大学助手